

私の中の長崎／その②回

文、藤原 暢子

*text by Fujiwara Nobuko

長崎はなん

ピンポン。今日も宅配便屋のお兄さんが息を切らせながら、段ボール箱を運んできてくれる。長崎に住む母から毎週届く〈救援物資〉だ。

野菜、果物、^{うなぎ}鰻、かまぼこ、手作りのゴボウ巻き、お菓子……。長崎で生まれ育った18年間。大学入学のために上京して、すでに20年間で東京で過ごしているのに、いまだに私の体は〈長崎の食べ物〉で形成されている。

出版社勤めで帰宅が夜遅いので、平日に買い物に行くことはまずできない。自宅近くにはコンビニしかないから、普通の食材が買えない。週末、たまにスーパーに行っても、ミカン4つ入りパックが300円なんて書いてあると、高くて思わず尻込みしてしまう。

結局、昼食も夕食も会社の隣のコーヒーショップでホットドックを買ってきて、会社の机でかじる日々。

栄養学の専門家だった母が見かねて、〈救援物資〉を20年近く送り続けてくれている。ブロッコリーやアスパラ、エリンギなど、東京のスーパーにも並んでいるのに、我が家の冷蔵庫に取まっているものは、築町市場や浜屋の地下で調達された食材（荷物持ちと運転手は姉が担当）。さらに夜中に帰ってすぐ食べられるよう、日持ちする、母手作りのおかずも入っている。

MADE IN
NAGASAKI TO TOKYO

1988 - 2009

締め切り前で自宅に帰れない日が続くと〈救援物資〉は会社に届くこともある。そういう時は、「編集部の皆さんとどうぞ」とお菓子が多め。大好物の桃カステラが届いた時は同僚たちがカメラを持って集まってきたので、こちらが驚いた。「それ何?」。見たこともない衝撃的な形だったらしい。「よりより」や「一口香」も最初は皆、おっかなびっくり食べていたが、今や会社で人気のお菓子アイテムだ。

ちょっと早めに家に帰れた日は冷凍庫から「冷凍ちゃんぽん」を取り出して食べる。こちらは叔母が定期的に送ってくれる、ありがたい常備食だ。お米を炊く余裕がある日は大事に取っておいた「うなぎの松本」（築町市場）の鰻が登場する。食後は段ボール箱にたっぷり入った長崎のミカン……。

宅配便の回数券まで買っている母は、「送るのが趣味なのよ」と照れ笑いするが、「果物はある? 野菜は何かいい? 何曜日を受け取れる?」と毎週真剣に電話してくる。

そんな訳で、今も私の食生活の8割は長崎のもの。体の成分だけ考えたら、〈長崎在住の人〉と分類されるだろう。「長崎の料理って全部甘いよね」なんて意地悪を言う輩を無理して、今日も長崎のご飯を噛みしめる。

「きちんとバランスの取れた食生活をしなさい」と、毎度書かれた母からの手紙を読みながら。